

## シベリア抑留者の体験記について

三重県 松本春男

表記の件について、正直言つて自分も満八十歳の高齢に達し、種々その体験記について無数の記録が頭中に残っておりますが、一部始終総て明白に記載を、の件については至極困難な点を予め申し上げて執筆いたします。

### 記

私は大正十一（一九二二）年五月三十日、三重県志摩郡磯部町沓掛に生を受け、磯部尋常高等小学校を卒業。

昭和十二（一九三七）年四月、当時大阪の関西工業学校（現在の大阪工科大学校）の二学年に入學いたしました。そして昭和十六年三月二十五日に卒業して、卒業時の成績は四番と割合好成绩だったことを記憶しております。当時、実家には既に

父を亡くし、母親一人、実兄は現役（韓国竜山）で、のち数回、中国の北、中支へ召集されており、戦闘に参加しておりました。すなわち私が工学中にあった記憶が思い出されます。

さて私事ですが、学校卒業後土建会社に入社して、当時、大阪、横浜、青森県大湊の海軍の軍舎等建築場の現場監督をして指導に当たっていました。昭和十七年に徴兵検査を故郷で受けて、志摩郡鵜乃小学校でしたが、検査は志摩郡でトップの合格であったことを記憶しております。昭和十八年一月十三日、歓呼の聲に送られて、代表者として出征兵を代表して挨拶し、広島集合にて伊勢神宮へ参拝して一同十五人広島へ。次に下関から釜山、朝鮮半島を北上して、一月二十三日だったと思うが、当時満州東寧の三六一一部隊入りした後、軍隊の規則に沿って軍律厳しく初年兵の務めを実行する。

二年兵以後は自分も本部命令で初年兵教育係に。後、本部の兵器係に。途中、命令でチチハル

工兵学校へ配属されて、数日後ソ軍が東寧辺りより東側から宣戦して来た。そこでチチハル工兵学校での命令で原隊復帰へ。途中牡丹江で列車動かす。よって我々工兵隊の肩章故に三〇キロ爆弾を与えられ、ソ軍の戦車攻撃隊員として戦闘に参加す。すなわち決死隊であったわけである。

一夜明けて、すなわち八月十七日午前十時頃、全員が舎前集合し、隊長、もちろん他部隊の将校曰く、「実は昭和二十年八月十五日、天皇陛下の玉音にて戦争終結との命令下る。ソ軍侵入しても一切手出しはならん、よいか」。

後、海林という所に満州関東軍の大半が集結して時を待つ。そして九月二十二、三日頃、ソ軍の指示により、「ウラジオストツク港へ、そして日本ダモイ」の言葉に乗せられてソ満国境の綏芬河を通りソ連の地へ。

十数日歩行し、日照あれば南北が分かるが、十月三日か、日が沈む頃山奥へと入る。直ちに木を切り、幹を柱に屋根等を枝で囲って仮装住居に。

それぞれの案件処理後、眠りに入る。翌朝から山へと伐採作業に。朝星夜星の重労働、着の身着のまま、顔洗うでなし、洗濯ももちろん、入浴等一切なしで、足元から頭の先までシラミの大群に血を吸われて骨皮筋工門の言葉が適当なり。すなわち十月〜十二月約三カ月、一日の休日もなし。

昭和二十一年元旦が待ちこがれた休日だった。すなわち二十二歳の若い年に頭の毛一本もなく、栄養失調の極に達したと言っても過言でなし。食事の方は一片の黒パン一枚だけ、お茶はもちろん、水分の補給全然なし。腹が減った、何か口に入れるものを多少でも思いつつ作業帰りの暗闇の道中で足で探して、コロコロと足に当たった物を拾って帰隊して見たら、シベリア凍土の地での思い出は馬糞であった。ただし、一旦飯盒にて茹で合わせて一部残存する未消化物、例えばトウモロコシ等を分別して一口だけでも腹の足しにと食した記憶も頭にある。

伐採作業が十月末頃終わり、これまた次の作業

へと数日歩いて広野が眼前に見える。一泊して次の日にシベリア大地の稲畑、すなわち稲刈り作業に動員される。これまた朝星夜星の強制労働、死相間近のどん底生活。稲刈りしても一粒の米も与えてくれず、一方刈り取った稲は山積みして、後日ソ連が脱穀機で処理することにて、我々は刈り取るのみの作業なり。翌日作業場へ入ると、鼠の大群が最高の食料と食べに来ている。それを我々皆が我先にと殺傷して腹のポケットに入れ、昼食時あるいは休息時に焚火をして鼠を焼き空腹を満たした一歩でもあった。現代の若人または一般大衆の人々に言っても通じない作り言と受け止められるかも…。事実我々がシベリア抑留で体験して来た状況なり…。

このような苦痛の生活の中、一月中旬頃までの稲刈り作業中、多数の人々が夜床に就くが朝になると起床合図で声もなく、死亡していく。明日は我が身かと心中分裂するも如何とも仕方なし。申言すること山積するも以上なり。前記詳細止むと

ころなしだ。

さて、一月二十日頃、東京ダモイの嘘言葉に乗せられて夜行列車（貨物）に乗って朝方某駅へ着く。雪は降りつつも初めて街らしい駅頭だ。降りる者へソ軍の女医かも、一人一人に片言で、頭痛いか、腹痛いかとのこと。自分は何故か足が痛いと言する。すなわち次の作業で働けるか否かを決定する確認の言葉であったのである。すなわち健康者と病弱者と分別したのである。結果、自分は病弱者として入院病棟へ送られる、そして詳細は際限なし。前記夜行列車中に空腹等体力の限界で足が凍傷になって、その後治療にのみ病院生活に専念する。凍傷は全治なし、傷口は悪い所とよい所の境目の多少よい所から昔の木鉄で切断する。痛み止めの薬とか注射なしで目の前で切り落とされて、あの時の痛感は今でも忘れ去ることなしだ。連日包帯の交換、目の前でジャリジャリと音がする、その痛さは受けた者しか分からない…。

五月頃だったか、軽傷の者、元氣回復者は再度労働へ、我々全治皆無者はダモイ東京とのこと。

詳細は忘却だ。帰って地図を見て、ソ連と北朝鮮との国境辺りのポセツト湾より船に乗り、北朝鮮の茂山という所へ臨時在住して約一カ月過ぎとして南下、咸興へ下がり約二週間位、興南港へと。いよいよダモイ、日本へと港へ誘導されるが、再びソ連へかと心中動揺しつつ行くも日の丸のついた船が目映る。あれだあれだと乗船する。天候よし、波風よし。動き始めると南へ南へと航進する。二日間位か、次々と小島とか松の木とか、久しぶりに竹林が見えてくる。まさに九州航路だと安堵感充滿だ。そして着いた所が長崎の佐世保港だ。

軍隊での数々の数奇を回想しつつ、帰還後は多少の巡回の中、満六十六歳まで元気に職業を重ねつつ、現在は厚生年金と軍隊、シベリアの傷病年金を受けながら満八十歳の昨今なり。

種々記載いたしたいこと山積しておりますが、

その一つ一つを列記することは最早老境に達し削除いたします故、悪しからず御放念賜りますようお願い、筆をおかせさせていただきます。

乱文乱筆を併せて御容赦下さい。

## シベリア抑留記

滋賀県 小杉 良夫

生い立ちから入隊まで

私は、大正十三（一九二四）年五月二十五日、近江八幡市馬淵町、福永太左衛門の六男として出生。小学校三年生の一月、母死去。昭和十二（一九三七）年馬淵小学校卒業後、義兄（姉の夫）の経営する三中井百貨店の本店のある朝鮮京城（ソウル）府に行き、昭和十六年十一月京城公立商業学校を繰上げ卒業して、昭和十七年四月、三中井百貨店奉天（瀋陽）支店に入社。その後、大邱店へ転勤。昭和十九年十月二十日、現役兵とし